



教室の窓から④

1日(金)の2時間目の教室を窓から見ていると、5年2組で道徳科の授業が行われていました。教科書の「森の絵」という題材をもとに、「よりよい学校生活、集団生活の向上」について考える授業をしていました。登場人物のえり子は、学芸会でやりたい役になれず、やる気が出なかったのですが、どの係も劇を支える大切な仕事であることに気付いてがんばろうとします。そのえり子の気持ちの変化について考えることを通して、役割を自覚し、責任を果たす大切さに気付かせ、集団の一員として進んで責任を果たそうとする態度を養おうということをねらいとした授業でした。担任が「集団の一員として大切な心はなんだろう?」と問うと、子供たちは「自分のことだけ考えず、周りの人のことも考えること。」「責任をもって役割を果たすこと。」「自分だけではなく、集団のことも大切にすること。」など、それぞれの価値観を共有していききました。そして、「集団の一員として」どんな心で生活していきたいのか、しっかりと自分の心と向き合っている姿がそこにはありました。



水はどこから来るのか

釣りに行って、海上でふと考えたことがあります。「この海水はどこからやって来るのだろうか?」ということです。その疑問を解決するために調べてみると、日本列島には太平洋からの水が押し寄せているそうです。「それは地図を見ればわかるよ!」という声が聞こえてくるとおもいますが、実はこの海水は、1万m以上離れた南極からやって来るのです。海水には、冷たいほど重く、塩分が多いほど重いという性質があります。世界の大洋(大きな海)の深海に広がる重い水は、北大西洋の北部と南極海から潜り込んでやって来ます。南極大陸の沿岸には、大陸から吹き降ろす冷たい強風に冷やされて、海氷がたくさんできる場所があります。その際に、氷の中に入れずに取り残された塩分で重くなった海水が、南極大陸周辺の海水と混ざり合いながら、深海へと潜り込んでいきます。この海水のことを「南極低層水」と呼び、全世界の海の底に広がっています。太平洋では2000m以深の水は2℃以下となっていて、そのかなりの部分は南極底層水起源の水で占められています。しかし、ここ20~30年で、南極低層水の水温が少しずつ上がり塩分濃度が減りつつあることが分かってきました。海洋深層循環が変わってしまうと、海の持っている熱容量は非常に大きいので、地球上の気候が激変する可能性があるそうです。科学者たちは、地球規模で流れる海水の循環が伝える変化のつながりを解明していこうとしています。命の起源である水の尊さを実感させられる話です。

